岡豪風日

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第76号 2011年9月1日

秋葉祭りの写真　仁淀村（現仁淀川町）昭和30年代

資料見聞

秋葉祭りの写真

田辺寿男の民俗写真より

冬の早朝、山里に法螺貝が響き渡ります。仁淀村（現仁淀川町）の秋葉神社大祭当日の夜明けを知らせる「一番貝」です。凍てつくような澄んだ空気や静けさを感じさせるこの写真は民俗写真家・田辺寿男氏が撮影しました。

当館は、田辺氏の写真資料を約５万点収蔵していますが、この写真は今年新たに寄贈されたアルバムの中の１枚です。昭和39年（１９６４）、田辺氏は「仁淀村と無形文化財」というタイトルの個展を開きました。この個展をみた桂井和雄氏から土佐民俗学会に誘われ、田辺氏にひとつの転機が訪れたのでした。アルバムには、そんな個展に出品された写真が貼られています。

アルバムの頁をめくると、秋葉祭りの他に若水取りや鍬初め、虫送りといった民俗行事に、それぞれコーナーを割いていたことがわかります。そうした構成からも、田辺氏にとって民俗学との邂逅は必然だったのではないかと思えてきます。

田辺氏は土佐の民俗に魅了されて写真を撮り続けました。田辺氏の受けた感動が、その写真をみる人の心に、時を越えて伝わってきます。　（中村）

開館20周年記念
企画展

「土佐を撮る　田辺寿男の民俗写真3」によせて

会期　平成23年9月10日（土）～12月18日（日）

中村　淳子

今回の企画展は、昨年6月17日に亡くなられた田辺寿男氏（1921～2010）の追悼写真展です。

昨年は、絵金蔵で『生命の記憶　田辺寿男追悼写真展』が開催されました。田辺氏が撮影した昔の赤岡の写真が、館内のギャラリーとともに赤岡町内の商店や一般のお宅に展示され、多くの方が散策しながらご覧になっていました。赤岡の町にとけこんだ田辺氏の写真を見て歩いていると、調査にお連れいただいた頃が思い出されました。

田辺氏は、平成13年（2001）に病で倒れるまで、積極的に土佐の民俗を調査して写真に撮り続けました。

集団移転後も続けられている村人総出の道普請に同行して山村の跡を訪ねたり、川船の製造工程を調査するためにお住まいの高知市から100㎞以上離れた中村市（現四万十市）へ朝6時出発で一週間以上毎日通ったりと、80歳近いご高齢とはとても思えない活力にあふれた仕事ぶりでした。

そこで今回は、写真の他に調査カードやノートを展示し、調査者としての田辺寿男氏をご紹介したいと思います。

また、今回は当館が開催する田辺氏の民俗写真展としては第3弾です。

田辺寿男氏　窪川町（現四万十町）志和にて
昭和51年6月13日　武吉孝夫氏撮影

平成11年に第1弾でお声がけしたとき、田辺氏は、芸西村で昭和40年代に行なわれた「集団移転」の写真群を選び、「ぼくの村は山をおりた」という写真展が生まれました。

平成18年に開催した第2弾「いのちの河くらしの川」は、田辺氏から約5万点の写真資料を寄贈いただいた記念の写真展でした。

写真集『海辺』と『山間』に続いて田辺氏が準備を進めていた『河川』を企画展の共同作業を行なった翌年には、田辺氏から「共著で本を作ろう」と誘っていただき、本を作る目的で何度か調査でご一緒しましたが、田辺氏が病で倒れられ、叶いませんでした。

元にしたため、タイトルに「河」と「川」の文字を入れました。

今回の第3弾「土佐を撮る」は、これまでのタイトルとは異質ですが、ストレートな味わいが田辺氏の写真の特徴を案外よく表しているかもしれないと思います。

その一方で、田辺氏の緻密さは、全体の流れがよく考えられた個展や写真集の構成にあらわれています。

例えば、本紙1頁でご紹介した個展のアルバムは、第1部のロングショットでとらえた仁淀村の風景の写真からはじまります。写真は、雪の降り積もった道、谷、山、茅葺き屋根の家、氷柱の垂れ下がった軒、囲炉裏に火の入った部屋と続いてゆきます。

まるで、旅人が少しずつ村に近づいてきて、最後に家の中に招き入れられるような趣きです。あるいは、古里を遠く離れた村人が、なつかしい我が家へ帰ってくるような感じもします。

第2部から第4部では若水迎えなどの民俗行事を取り上げて山里の暮らしを紹介し、第5部に秋葉祭りの高揚をもってくるという秀逸な構成です。

しかし、田辺氏が亡くなられ、同氏が考えた構成の展示はできなくなりました。

現在は、心の中で田辺氏と会話しながら展示を組み立てています。

山の神祭り後の直会（なおらい）　高知市三谷　昭和54年

冬を迎える　梼原町四万川　昭和38年

当屋でおはけを祭る
春野町（現高知市）東諸木　昭和53年10月

秋葉祭りの獅子と子ども　仁淀村（現仁淀川町）　撮影年不明

３頁の写真は田辺寿男氏撮影

今回の企画展では、田辺氏が追いかけていたテーマをいくつかピックアップしてご紹介したいと考えています。

例えば、冒頭の秋葉祭りや民俗行事、池川町（現仁淀川町）椿山（つばやま）の焼き畑、研究テーマのひとつだった和船など、それぞれが写真展や写真集に成り得る写真群です。田辺氏が時間をかけて追求したそれらについて全体を通してみると、大きなテーマが内包されているように感じられます。

田辺氏が会長を務めていた写真集団建依別写壇（たけよりわけしゃだん）の会員だった武吉孝夫さんや小林勝利さんは「田辺さんはシャッターをきるのが遅かった」と語っています。シャッターをきるまでにたっぷり時間をかけたことには、フィルムが高価だったとか、光の具合をみるとか、いろいろな理由が考えられます。「構図は二の次」と言っても、そこは写真家。構図をキメたいときもあったでしょう。しかし、あるいは、レンズの向こう側にいる人の心、そして自分の心の動きを感じる、その瞬間を待っていたのかもしれません。

田辺氏は、人の心が動きをみせるところを写真でとらえたいと考えていました。だからこそ、田辺氏が撮影したモノクロ写真の土佐は、新鮮でいきいきとした表情を私たちにみせてくれるのでしょう。

対談 田辺寿男の写真を語る

武吉 孝夫さん（写真家）
田辺 憩さん（田辺寿男氏長女）

平成23年6月12日、武吉孝夫さんと一緒に、田辺寿男氏のご自宅を訪ねました。田辺氏のお嬢さん、憩さんが出迎えてくださいました。

田辺氏が会長をしていた写真家集団建依別写壇（たけよりわけしゃだん）のメンバーだった武吉さんと、父の背中をみて育った憩さん。おふたりの会話は、田辺写真の魅力を解き明かすとともに、田辺氏への愛情にあふれるものでした。

左：田辺憩さん　右：武吉孝夫さん

板子一枚下は地獄

武吉　田辺さんは戦争から帰ってきて、一時、海で漁師をしよったと聞きましたが。

田辺　あまり長い間ではなかったんですが、祖父と一緒に高知市種崎で漁師をしていたそうです。

南海地震の時は海に出ていて須崎沖で流されたと言うてました。戻るのに2、3日かかったので、皆は遭難したと思っていたそうです。

父は祖母の連れ子でしたが、利発な子で、祖父がうんとかわいがったそうです。

近所の大店（おおだな）から父を養子に欲しいと言われると、祖父は、「寿男はやらんけど、圭次（血のつながった自分の長男）ならやる」と言ったほどです。お世話になったお医者さんから養子にと言われたときには、一家で種崎から祖母の里の甲浦（かんのうら）（現東洋町）まで4年間逃げていたそうです。

祖父は父が大好きで、手放したくなかったんですね。漁師だった祖父は、父と一緒に海に出たかったんです。

武吉　田辺さんと海の取材で一緒になったとき、田辺さんは、「手こぎの伝馬船で沖へ行って漁をすると、『板子一枚下は地獄』ということが実感としてわかる」と言うてました。

そういう実感が、後に平尾賞をとった流れ仏など海の信仰の研究につながっていったのではないかと思います。

自転車店で写真を現像する

田辺　父は、子どもの頃、御畳瀬（みませ）（現高知市）で船から海へ落ちてスクリューに巻き込まれそうになったことがありました。

漁まねきの日の竜宮　奈半利町加領郷　平成４年　田辺寿男氏撮影

戦時中、海軍の制服は憧れの的だったそうですが、父は「海は何かあったら助からん。海より自分の意思で動ける陸の方がまだ良い」と陸軍に入りました。

そんな父ですから、しばらくすると漁師をやめてタイヤの行商をはじめました。その後、自転車店を開きましたが、大橋通り（高知市の中心部）で自転車店をやっていた頃が一番なつかし

いですね。

1階が店で、2階が住まいになっていて、写真の仲間が訪ねてきたら父はうれしそうに迎えていました。

武吉　田辺さんはフィルムカメラ全盛の、いい時代を過ごされましたね。

田辺　写真を焼くときには、父に家中の電気を消されました。私が、「明日は学校の試験」というてもお構いなしなんですから。そんな夜は、母と話をするくらいしかなかったですよ。

橋の下　昭和30年頃　田辺寿男氏撮影

大きな写真を焼くときには、売り物の自転車を店の外に出して焼いていました。

写真仲間に育てられる

武吉　建依別写壇は、いい会でしたよ。大概の写真クラブは先生一人が、その他大勢を教えるんですが、建依別は違いました。自分の意見ははっきり言う。

大激論となることもたびたびでしたが、田辺さんは横でニコニコ笑いながら聞いていました。包容力のある田辺さんが会長だったから建依別は続いたのでしょう。

田辺　建依別の島内吉康さんや清岡義道さんがよく家に来ていました。けれど、父が民俗学をやると言い出した頃、清岡さんとは行き来をしなくなったんです。父が写真から民俗学へ行くということが、清岡さんにしたら許せんかったようでした。

武吉　島内さんは早く亡くなりましたが、写真の実力があり、センスが良くて人間的魅力がありましたね。

清岡さんは、「写真をやるには、しっかりしたものがないといかん」と言い、いかにもパリッとした写真を撮っていました。そのふたりに比べると、田辺さんの写真は垢抜(あかぬ)けしていないんです。けれど、ジワッと響いてくる。写真は下手やけど味わいがある。

上手下手とは違うところに「写真の本質」があるということが、田辺さんの写真をみているとよくわかります。

田辺　父は、写真をやったことで凄い仲間が出来ました。写真とその仲間が父を成長させたんだと思います。

民俗学にのめり込む

武吉　一緒に取材に行くとわかりますが、田辺さんは本当に人の話をよく聞くんです。それは、しつこいくらいに。

田辺　私も父から話をよく聞いちょったら良かったのにと、今になって思います。父はどちらかというと寡黙な人でしたから。それに我慢強かった。病に倒れてから何ぼかえらかった（辛かった）ろうにジッと堪えて、世話をする私たちに優しく接してくれましたよ。

武吉　田辺さんは、大器晩成型だったと思います。倒れてなかったら、まだまだ成長していたはずです。

学問をやってる人は、大学や高校の先生をしながらという人が多いでしょう。けんど、田辺さんは、自転車屋のおじさんですからね。相当な努力家だと思います。

田辺　父は、上の学校へ行きたかったろうと思うんです。勉強したいという思いをずっと持っていたんでしょう。

集中力が凄かったですよ。原稿か何かはじめたら、テレビをつけていようが、私がピアノを弾こうが聞こえなくなるようでした。

武吉　田辺さんは、民俗学をバックボーンとして「人間の幸せとは何か」を問いかけていたのだと思います。それが田辺さんの写真の、最大の魅力になっています。

常時どこかに祈りの心があったのではないかと思うのです。

田辺　亡くなってこの一年、父はどんな人だろうと思ってきましたが、今、武吉さんが「祈りの心」というてくれて、ストンと腑に落ちました。私は昭和24年生まれですが、子どもの頃はまだ戦後という感じで、橋の下で暮らす家族がいました。普通の親は「ダニやシラミが付くから付き合われん」と言うてたけど、父母からは「橋の下に行かれん」とか「誰々と遊ばれん」とかと言わたことはありませんでした。

父は、よその子もうんとかわいがったし、弱い立場の人を大切にしました。

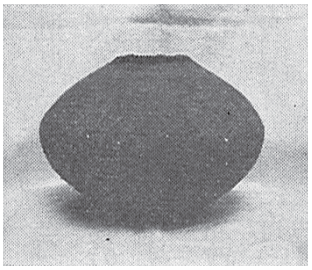
病気で倒れた後のこと、元気な頃をふり返って、「民俗学が楽しゅうてたまらんかった」と言うていました。

（聞き手　中村）

考古

岡豊（おこう）山の遺跡
⑧岡豊山古墳の発見

昭和9年（1934）10月に発見された岡豊山古墳ですが、昭和34年（1959）刊行の岡豊村史編纂委員会編『岡豊村史』によると発見月は五月頃となっています。さらに、「詰（本丸）の段の西南角を掘って道をつくった際に須恵器の壺と直刀が出土した…」とあります。この村史には、「岡豊山古墳より出土「土器」」と「岡豊山古墳出土「直刀」」として須恵器壺と直刀の各写真が掲載されています。写真はかなり綺麗に撮影されています。この他にも須恵器が存在していたはずです。直刀は、現在の詰にある城八幡にかつては納められていたといわれていますが、何時頃からかなくなっていました。須恵器については、今後の調査でみつかる可能性もありますが、当古墳から出土した須恵器とは確実に断定はできないかも知れません。詰周辺の発掘調査で須恵器は、確認されていません。なお、近年伝家老屋敷跡などの発掘調査で須恵器片が確認されています。（岡本）


岡豊山古墳より出土「土器」

岡豊山古墳出土「直刀」（いずれも写真は『岡豊村史』より）

歴史

日本初の喫茶店「カフェーパウリスタ」

当館には水野龍や竹村植民商館をはじめとするブラジル移民関係資料が収蔵されています。水野龍（佐川町出身）は、明治41年（1908）6月18日、781人の移民をブラジルサントス港に上陸させた第1回の移民船「笠戸丸」の移民団長です。また、水野は、日本にはじめてコーヒー豆を輸入し、販売した人物でもあります。水野は、明治42年（1909）ブラジル共和国サンパウロ州政府からブラジルコーヒーの東洋での一手宣伝販売権を与えられ、翌年ブラジルコーヒー宣伝販売所カフェーパウリスタを設立しました。明治44年、水野は白亜3階建ての洋館を新築し、「カフェーパウリスタ銀座喫店」を開店させます。大正時代のパウリスタは、多くの作家や画家、映画人などが常連として集まる文化の拠点のひとつでした。また、パウリスタは、コーヒーを一般大衆でも楽しめる安い値段で提供し、全国主要都市に支店を開設して、コーヒーを多くの人々に紹介しました。明治・大正・昭和・平成のそれぞれの時代の人々に愛されてきたカフェーパウリスタ。その創始者、水野は、日本のコーヒー文化草創期に大きな役割を果たしたのです。なお、銀座店は昭和45年（1970）、東京銀座8丁目に再開され、現在も営業しています。（寺川）

現在のカフェーパウリスタ銀座店

民俗

城下町サロンの七夕祭り

2006年9月発行の『岡豊風日』第58号の本欄でもふれていますが、当館ではカルチャーサポーターが主体となって、県内の七夕行事を再現するワクワクワークを行なっています。19年度は津野町芳生野、20年度は越知町桐見川の七夕飾りに取り組みました。21年度と22年度はリニューアル準備や特別展「龍馬伝」のためにお休みしましたが、23年度は津野町姫野々の城下町サロンの七夕祭りにお邪魔してきました。このサロンは、姫野々が戦国時代に津野氏の城下町であったことにちなんで命名され、月に1、2回地域の方が集まって親睦を深めています。この日は、男性は藁馬（わらうま）や縄作り、女性は紙飾りと料理班に分かれて準備。飾りが出来上がると皆で和気あいあいの懇親会になりました。かつては家毎に行なっていた七夕祭りですが、地域のコミュニティがしっかりその精神を受け継いでおられるのに感心しました。ぜひこれからも長く続けていって欲しいと思いながら会場を後にしました。（梅野）

男性陣は藁馬などを担当

紙飾りを準備する女性陣

れきみんニュース

第2回長宗我部フェス開催！

今年の長宗我部フェスは、3会場を結んでのフェスとなりました。

第1会場はもちろん岡豊山（写真）で、戦国仮装コンテストや楽しいイベントが開催され、第2会場は県立美術館ホールでの東京の劇団シアターキューブリックによる「誰ガタメノ剣・長宗我部元親伝」、第3会場は、長浜・若宮八幡宮での初陣祭と、賑やかなイベントとなりました。特に岡豊山でのフェスには南国市と地元団体、そして当館とで共催の「食1グランプリ」も開催されて多くのお客様で終日賑わいました。（猪野）

平成23年度 岡豊山フォトコンテスト結果報告

二十三年度 岡豊山フォトコンテスト入賞作品を前号に引き続いてご紹介いたします。来年も皆様の力作をお待ちしています。（猪野）

優秀賞「心のふるさと」撮影：前田龍夫　様

優秀賞「可憐」撮影：川島美智代　様

志士の遺墨、寄贈さる！

東京在住の小泉聡氏より、この度、土佐勤王党員だった土方久元と、尊攘派上士・佐佐木高行の書をご寄贈いただきました。久元の七言絶句は、山口の旅宿で七卿落ちに追従した時の事を思い出し、再び京へ帰ることなく没した錦小路頼徳と朋友・山本忠亮を悼んだもの。高行の書は、「曾我兄弟の仇討ち」を題材に一気に書き上げたもの。これほど奔放な筆致は高行の遺墨の中では異色です。この2点の新資料は、来年の開館記念日（5月3日）に初公開する予定です。（野本）

右：佐佐木高行短歌
左：土方久元七言絶句

本陣新アイテム登場！

体感コーナーとして好評をいただいている長宗我部展示室本陣に新しい展示物が加わりました。リニューアル時に間に合わなかった、樽・柄杓・米俵・篝火・唐櫃・鞭といった小物類です。いずれも本陣のリアリティーを出すためには必須のアイテムだったため、今回の追加展示となりました。すべて推定による復元ですが、中世史の網野善彦先生らが指導・助言された、岡山県美星町の「中世夢が原」の展示物を一部参考にしています。字が小さいと不評だったキャプションも1・5倍の大きさにして再設置。是非ご観覧ください。（野本）

樽:中身は酒でなく真水を想定

唐櫃:中には元親の私物が入っているかも!?

特別展のご案内

「発掘された日本列島2011」

2012年1月2日(月)～2月14日(火)

主催　文化庁・東京都江戸東京博物館・新潟市歴史博物館・静岡市立登呂博物館・九州歴史資料館・高知県立歴史民俗資料館

日本では、年間7000件ほどの発掘調査が各地で行なわれています。その中で今回は、特に注目される21遺跡、約500点の出土品を集めました。奈良県四条古墳の木製埴輪をはじめ、甚大な津波被害を受けた南相馬市に位置する古代の製鉄コンビナートともいわれる「史跡椿大道製鉄遺跡」の資料などを展示します。平成22年の秋、特別名勝に指定された「平城宮東院庭園」の発掘調査並びに保存整備事業についても紹介します。

発掘調査によって新たにわかった日本の歴史を発見しに、この冬、岡豊山にお越しください。

四条古墳群力士形埴輪（奈良県）

一条氏と土佐七守護巡り

土佐の戦国時代の史跡やゆかりの地を解説ガイドとともに巡ります。詳細は事業課へお問い合わせください。9～3月に開催予定です。

9月1日(木)～2012年1月1日(日)
1階企画展示室 工事のため閉室

9月1日(木)～9月9日(金)
12月19日(月)～12月26日(月)
3階総合展示室 展示替えのため閉室
（長宗我部展示室のみ見学可）

岡豊風日（おこうふうじつ）第76号
平成23年9月1日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783－0044　南国市岡豊町八幡1099－1
TEL　088(862)2211
FAX　088(862)2110
開館時間　午前9時～午後5時
休館日　年末年始12月27日～1月1日
臨時休館あり
観覧料　通常期［常設展］大人（18才以上）450円・団体（20人以上）360円
（企画展）常設展示込500円・団体（20人以上）400円
無料：高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者、療育手帳・身体障害者手帳・障害者手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者（1名）
印刷・川北印刷株式会社

http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~rekimin/
Eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp

平成23年 9月～12月の催し

企画展 土佐を撮る 田辺寿男の民俗写真3

平成23年9月10日(土)～12月18日(日)

海から精霊を迎える　須崎市野見　昭和44年（1969）

講　座
●電話等で要予約（講師:武吉孝夫氏）

12月11日（日）14:00～15:30
「フィルムからみえてくる田辺寿男の写真観」（先着100名）

展示室トーク
●予約不要（講師:担当学芸員）

9月10日（土）　13:00～14:00
10月23日（日）13:00～14:00
※上記の催しは全て観覧料が必要です

ワクワクワーク
●電話等で要予約（講師:いずれも武吉孝夫氏）

- 10月30日(日) 10:00～15:30
  「ピンホールカメラをつくる」（先着5名）
- 11月27日(日) 10:00～12:00
  「モノクロ写真を撮る」（先着10名）
- 12月4日(日) 10:00～12:00
  「モノクロ写真を焼き付ける」（先着10名）

シンポジウム
●電話等で要予約

11月5日（土）　13:30～16:30
「民俗を記録する／伝える」四国民俗学会と共催（先着100名）

関連企画 東京写真月間2011巡回展

写真の日 記念 入賞作品の展示　10月9日(日)～10月23日(日)

コーナー展 干支（えと）の玩具 辰（たつ）

2011年11月12日(土)～12月18日(日)

山﨑茂さんのコレクションから辰（龍）の郷土玩具を展示します。

六原張り子（岩手県）

◆展示室トーク　11月12日(土)
講師：担当学芸員●予約不要

◆ワクワクワーク　「龍張り子の絵付」11月23日(水)㊗14:00～15:30
講師：草流舎・田村多美 氏●電話等で要予約（先着30名）
※参加費　1,200円

◆こうちミュージアムネットワーク　博物館巡回講座　●予約不要
12月3日(土) 13:00開場　13:30開始（15:45終了予定）
会場：当館多目的ホール
●山内家の新年行事　土佐山内家宝物資料館　館長　渡部淳 氏
●干支と郷土玩具　高知県立歴史民俗資料館　学芸専門員　中村淳子